

## 画商あれこれ



### 善田正男

#### 画商漫遊す

蛙の子は蛙で、大学卒業と同時に父の経営している日本の新古美術品の店、善田昌運堂に入社しました。門前の小僧云々という言葉があるように、子供の頃からの環境で案外早く仕事になじむことが出来ました。そして十年の月日が流れ、その間に外国の美術品に接する機会もたびたびあり、いつも非常な関心を抱いていました。ところがはからずも一昨

三十七年四月に親しくしていたアメリカ人のオールギランティーで世界一週をさせてもらえる機会に恵まれました。そこでアメリカを皮切りにヨーロッパ各国の美術館行脚と観光を兼ね、あわよくば今後の仕入販売の参考に美術商、おもに画廊の状態や美術業界の動きなどもつぶさにこの目におさめたいと思い、単身出発しました。

アメリカでのそれらは新興国そのもので、どの美術館へ行っても歴史の短かい国だけ

に、自国の作品は近代のものしかなく、他国の美術品を財力にものをいわせて集め上げたという感じがしました。日本のものに関して はボストン・ミュージアムが岡倉天心と現東洋部門美術部長の富田氏（アメリカに帰化した京都出身者）の功績で予想以上に素晴らしいコレクションをしていたのには驚きました。他の美術館にも日本の作品が沢山ありましたが、ボストン美術館の比ではありませんでした。

現代絵画の動きについて、ニューヨークの画廊を見た限りでは、ごく一部を除いてほとんどが抽象画をおもにした、新しいものえのあこがれとでもいうのか、悪くいえば芸術家の作品というよりもアイデアマンの作品といったようなものの方が受けていました。それらを買う人々も自分はこんな芸術を理解できるのだという気持で買っているのでしょうか、とにかくそのようなものを非常に高値でコレクトしているという感じを受けました。とはいえ一部の店では世界の名画を数多く持ち、また古美術品も素晴らしい世界の名品の数々を所有していました。コレクターの種類も二種あるようです。

## ヨーロッパの画商たち

ヨーロッパでは、まずロンドンのブリティッシュ・ミュージアムに行きました。ここでは古代エジプトを始め各国の歴史的な作品が沢山揃い、二日間では全部を通覧できないほどの大変なコレクションでした。ただ残念に思ったのは、日本の美術品は実につまらないものが多く集められ、これが日本の代表的文化遺産だと思われているのは恥かしい気持ちでした。さすがに歴史の古い国だけにアメリカと違い美術業者もコレクターも全ての点で落着いた雰囲気を持ち、街全体が英国調にとけ込んでいたといった感じでした。

パリではさすがに文化芸術の都という感じに覆はれ、ルーブル美術館のモナ・リザを始め、これ迄美術書や写真で見ていたものを目前にして思わず身振りするほどの感激を味わいました。ここでは近代絵画も古美術品とともに実に素晴らしく、さすがに世界の宝庫というにふさわしい大美術館で、毎日の見学が楽しく、また頭の痛くなるのを感じました。

美術業者の方は、それこそ世界の有名な画商が店を並べ、各店とも数百万、数千万円も

の絵を店頭で並べ、別室に入れば何億という絵を私有しており、日本画商とのスケールの違いをまざまざと見せつけられました。第一級の仕事をしているというプライドを持ち、有名なビュッフェを育て上げたダビッド画廊主などはわずか三十五才ほどの人で大変なコレクションを持ち、われわれなどは、彼らから見れば、吹けば飛ぶようなものではない。しかし私も精一杯の背伸をして彼に對して来ました。そして彼らとの話合によって今後日本へもフランスの絵がどんどんと輸入出来る見通しをつけてフランスを後にしました。

### コプト織の魅力

スイス、スペイン、イタリーを経て、最後にエジプトのカイロに着いたときは、日本を発つてから早や二カ月もたち、手許の金もようやく心細くなっていました。エジプトの古美術品を輸入することが主目的であっただけに、最後の勝負どころということもあり、疲れも何もかも吹きとばし、先ず第一に過般日本で行なわれたエジプト展の品々を貸してくれたカイロのエジプト・ナショナル・ミュージアムに乗り込みました。スゴイ、全くスゴイ。

世界の古代文化発生の地エジプトの偉大な歴史的遺物が何のケースも無く足下にゴロゴロと並んでいたり、小さなものはケースに並んでおりますが、それは陳列というのでなく、ただ雑然と無雑作に入れて盗まれないようにしてあるといった感じでした。照明とか或は見物人に見やすいようにとかいうことは全く考えられていない有様で、これ迄見て来た美術館とは全然違ったものでした。しかし美術品は五千年も経たものがあつたかも知れず造られたような近代的な新し味を帯び、如何にこの国の古代文化が素晴らしいものであつたかという目を目の当りに見せつけられました。

いよいよ商売という段になり、日本から紹介状をもつて行ったカイロで一番信用の置ける業者に電話をかけた処、すぐ自動車で迎えに来てくれました。さて言葉が通じると心配しておりましたが、彼らは英語、仏語どちらでもということと私のように英語しか話せないものとは違っていささか驚かされました。店といっても、日本の場末の古道具屋といった感じで、外見は埃とガラクタの山です。こんなところに何があるものかと余り期待もせずは何か見せてくれと頼みますと、コプト織

つまり紀元後三世紀から八世紀迄のエジプトの裂―それに古王朝からコプト時代に至る石のレリーフ、その他ウシヤプティ、彩色木片等々を押し入れの中から取出しました。全部でも買いたかったのですが、金も少なく日本から送金する方法もよく解らなかつたので、とりあえず虎の子を全部出してコプトの裂を買いました。翌日からは、その人の案内でカイロ・アレキサンドリヤなどのいろいろな名所や美術館を廻り私自身いよいよエジプトの虜になりそうでした。

### 美術の東西交流

二カ月の旅を無事終えて帰国し、海外における種々の成果を考え合せ、私自身これ迄日本の美術業界が鎖国状態にあり、海外から何らかの方法で入手した美術品を奪いあつて価値以上の評価をしたりしている現状や、また他国では、自国以外の文化遺産を美術館に多く並べ、国民がそれに接する途のあるのに対して、日本では中国のものは相当優秀なものがかきており、美術館、コレクターなどにならずに沢山所蔵されていながら、一方では西洋絵画、古代西洋美術品の類が極く少ないこと、また

日本の現在作家の画は景氣の変動によって価格が非常に左右され易いが、これが世界的な安定性を持ち、いづれの国へ行っても同じ価格或はそれに近い価格で売れるということになれば景氣の変動にそう簡単に左右されることなく、コレクターも安心して蒐集出来るといった諸点を考え合せました。それに、以前より美術品の貿易はほとんど自由化に近く、私も是非とも外国の古代美術品や西洋絵画の専門の店を開きたいものと決心しました。父や兄に相談を持ちかけましたところ地の利的には京都では駄目だろう。やるなら東京でやってみてはといわれ、その氣になつていよいよ本格的に輸入手続方法などを研究し、大體の見通しも出来上り、再度渡欧の手続を取りました。九月の渡欧は前回の旅行と違い、仕事を前提としたもので、目的と時間に制限があり、それだけ逆に仕事上の生き甲斐を感じる外国取引の初陣ということにもなり、アンカレッヂ經由北廻りで直接フランスに乗込みました。ビュッフエ他二三点の画、イタリヤの古美術品、エジプトのレリーフ、コプトのウシヤプティ、彩色板などを買いまし

たのですが、第一回のトライとしては少々思い切つたことでした。一回目より二回目と業者間の信頼も大きくなり相手の業者も『次の機会を待つ』と心から喜んでくれたようでした。私の方針としては、日本でもラストプライスを聞き、それによって買いか買わないかを自分で判断をすることにしていきます。外国の取引でもそのようにしたので勝負は早く、業者も私に対して非常に正直に交際してくれようでした。その上、私の国内での販売状況などにも心を配ってくれるところなどは友情に国境なしということだと思ひます。

十一月になつて文部省から連絡があり、パリのピチ・パレという美術館で日本文人画展が行なわれ、その陳列に国宝級の作品を出す、是非馴れた人ということで私が外国へ行った経験もあり、またその当時美術青年会の理事長もしていましたので、主催の説売新聞社の囑託ということで十二月にまたパリへ行きました。会期中暇を見つけては画廊廻りやローマ、カイロへも飛行機で往復し、元旦早々に帰国致しました。一年間に三回の外国旅行というのもちよつと記録的なことでしょう。

(校友・幸圃廊主)

## 働く人々にたいする伝道

金井愛明

### 1

第二次世界大戦の終結と同時に、世界の教会は伝道活動を積極的に開始したが、再出発をするために反省の契機となった問題のひとつは、いままで、教会は労働者階級の問題を自己の課題としてこなかったということである。

日本の教会においても事情は同様であつて、より深刻ですらある。日本の教会が労働者に対する伝道を自覚的に取り上げたのは、明治三十年頃からである。これは日本の近代産業が発達して、労働者階級が形成された時期にあつている。この時代の教会には大勢の労働者が入り込んでいた記録があるし、鉄道ミッションをはじめとして、キリスト者の労働組合の指導者が輩出している。しかし、

それも労働者階級と共に出現してきたサラリーマン階級へ次第にかたよっていつてしまった。いつともなしに、都市を中心とした中産階級に教会の基盤を固定していた。教会が意図して労働者伝道をやめたのではないが、結果的には、伝道の困難な労働者より、接触の容易な中産階級に向つてしまった。その後の労働者伝道は教会の外側の人々、今日の言葉ではアウトサイダーによつてなされてきた。賀川豊彦、山室軍平やホーリネスなどがそれである。これらの人々の働きは積極的な意味をもつているが、同時に限界をもつていた。第一はその運動が教会の働きとならなかつたということであり、第二は賀川豊彦の働きだけは下町伝道で中小、零細企業労働者が対象となつて、貧民伝道となり、社会事業的性格を強くもつていたのであり、山室軍平の労働

大衆への伝道は下町伝道であつたが、労働大衆の把握が判然としないので、小商人、職人などが対象となつて来た。ホーリネスも同様である。したがつて、厳密な意味では、労働者伝道というべきではなく、貧民伝道、大衆伝道という性格をもつて来た。いずれにしても、日本の教会の主流は中産階級を基盤として発展し、労働者伝道のない手は教会の外側の人々によつてなされて来た。しかも救済的性格をもつた大衆伝道である。労働者伝道は、明治三十年代に種がまかれ、第二次世界大戦が終るまで地下に深くうずもれて来た。敗戦は社会を急激に変化させた。教会とは無縁であつた労働者階級は、重要な社会的役割をもつて登場して来た。労働者階級を考慮に入れずしては、日本の政治、経済を考えることは出来なくなつて居るという事実、教会は目をとじることは不可能になつて居る。もはや「労働者は憐みの対象ではなく、解放の主体」として存在しており、労働組合は労働者の生活を守るための大衆組織であると同時に「人間を解放する」重要な使命になつて居ることを認めなければならぬ事態が出現して来た。

日本の教会は昭和二十六年頃から、職域伝道委員会を組織して、働く人々に伝道を組織的に展開した。その最初の協議会の申し合せをみると「日本のプロテスタント教会の伝道は、都市知識階級において発展し、社会の活動的勢力たる勤労大衆との接触は不十分だったことを確認する」「教会は勤労大衆にとつた保守的態度を是正し……歴史的転換期における教会の義務をはたす……」とある。具体的に展開されたプログラムとしては、職場の中で信徒を中心とした「職場聖書研究」と「労働福音学校」とである。しかし努力したにもかかわらず、結果は、サラリーマン層にしか接近することは出来なかった。そこで労働センターをたてるとか、種々の方策が考えられたが、労働者をたんに、伝道の草刈場の対象として、即ち教会の人数をふやすために、未開拓の地の任人とかみていないという態度をあらためないかぎり、労働者への伝道は出来ないし、労働者を伝道や教会のために手段化することをやめなければならぬという結論に達した。

関西労働者伝道は、これらの自己反省から出発している。この組織は、同志社大学神学部が中心となって、関西学院神学部、聖和女子短大などの協力と、京阪神地区の有志の牧師などによって結成されている。昭和三十一年の発足であるが、当初は(1)教会青年は労働組合と教会生活との間にあって苦しみ、自信を失っている。(2)職場聖書研究は経営者や管理職の人々の主権する集会であって、労働者は白眼視している。しかも集会の持ち方が、教会の出店の性格を強くもち、職場の労働者の交わりの形成にプラスにならない。(3)労働者伝道をするためには、労働者や組織に専門的知識をもって専心あたる人が必要である、などが討論され、先ず急務は労働者伝道の専任者を養成するにあるとして、同志社神学部、関西学院神学部、聖和女子短大に呼びかけた。当時、同志社大学神学部の学生だった平田哲、矢嶋信一、金井愛明の三人がインターン生として竹中正夫教授の指導のもとに参加して、各職場や組合に派遣されて実習をし、卒業後、平田、金井の二人は専任者となり、今日まで働きをつづけている。現在まで、インターン生として参加した神学生は二

十数名におよんでいる。

関西労働者伝道は組織労働者に対する伝道と協力を主としている。したがってこの働きの内容は労働組合の運動を通じて、労働組合の推進と労働者の救いにある。そのため(1)労働組合運動の理解者となり協力、奉仕をする。(2)職場のキリスト者を組合活動に積極的に参加させ、信徒の訓練をする。(3)労働者の教会を形成する、という三つのことがなされている。

(1)労働者伝道の特徴は労働者を教会につれてくることよりも、出て行ってその場で活動をするところにあるので、専任者、インターンの学生は総評や全労その他の組合本部を訪問したり、職場に労働者を訪ね、語り合うことが大切な仕事になっている。労働者の直面する困難な問題を知り、キリスト者として出来るだけ理解し協力をしている。主に組合の文化活動、調査、平和運動などを一緒にしてきだが、海員組合の子弟の教育や留居家族の家庭訪問などもなされた。問題は外から何か組合のたらないところをたすけるということ

はなく、いかにして一緒に新しい社会のために行動出来るにかかっている。

(2) 職場で働くキリスト者は(1)教会生活に熱心であるが、労働組合活動に無関心な人、(2)教会生活は消極的であるが、労働組合運動に積極的に参加している人、(3)教会生活にも、労働組合運動にも参加する人、(4)両方をほぼどにしている人、の四種類に分類出来る。プロテスタントの信徒は一部の人をのぞいては、教会性と世俗性の間にはさまれて、地の塩としての役割をはたしていない。労働者としての信徒は、教会に属しながら、同時にこの世の最尖端で生活をしているのであるから、自分の属している職場の交わりの中で、いかに生きるかは極めて大切な問題である。労働者がキリストを信じることによって、ますます労働者らしくならなければならない。しかるに、労働者がキリスト教を信じるようになる、労働者であることをやめてしまうという現象がおこっている。これはプロテスタント意識と実践の不徹底からくる。

労働者がキリストに生きることにより、労働者としての自覚に生き、自分の置かれた責任の場で、宣教的自覚をもち、組織的連帯の

中で、同時代の共通の悩みを負うことこそ、まさにキリスト者のあるべき姿である。われわれはかかる人間を求め、つくるために、各職場に働くキリスト者の交わりを職種別に組織している。

繊維労働者の会をつくり、職場における人間の責任、使命などについて語り合い、中小企業地帯には定期的に労働学校を開設し、総評幹部を迎えて労働問題研究会をもっている。

(3) 従来の教会は主として都市知識階級にその基盤をもっていることと地域社会を中心とした教会の形成とがなされてきた。しかし近代社会の出現は人々の生活や、生き方を変化させた。一人の労働者は家が存在する地域で生活すると同時に、一日の大部分を、職場ですごしている。したがって労働者のための教会は組織との関係において形成されねばならない。

そのため関西労働者伝道では海員組合を対象として、大阪の港区に八幡屋伝道所を作り、海員組合の留居家族と海上生活者を中心に教会形成をめざしている。中小企業労働者を対象として、東淀川に神崎川伝道所があ

り、未組織の労働者の組織化と労働問題研究、オルグ活動などの働きがなされている。

その他に総評の組合員を中心とした大阪北伝道所は、労働者とキリスト教の関係から現代に生きる人間の課題を追求している。京都では、西陣労働センターが同志社と協力して設立され、西陣労働者のための働きがなされ、更に新しい計画としては、堺の臨海工業地帯およびその他の新産業地帯に働く労働者のための労働センターが計画されている。

以上関西労働者伝道について書いてきたが、実験段階であるために、種々のあやまりをおかしたり、人々に迷惑をかけたたりしている。いまだこの仕事は出発した段階であり、実験的試みとして新しい方法なので、各方面から注目されて、実際以上に評価されているのが我々の苦痛であるといつてよい。

ともかく、この関西労働者伝道は同志社があったからこそ、はじまったといつて過言ではない。私達は同志社の先輩達が、労働者のためにたたかったことを知っている。同志社に学んだものとして、先輩が残した尊い遺産をついで行きたいと念じている。

(昭三三大神院・関西労働者伝道専任者)